史跡横須賀城跡Ⅳ

昭和62年度保存修理事業概報

1988

大須賀町教育委員会

史跡横須賀城跡IV

昭和62年度保存修理事業概報

1988

大須賀町教育委員会

例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡大須賀町に所在する史跡横須賀城跡の昭和62年度保存修理事業の概報である。
2. 保存修理事業は文化庁・静岡県の補助・指導を受けて、大須賀町教育委員会が実施した。
3. 保存事業に伴う発掘調査は、斎藤忠（大正大学名誉教授）・小和田哲男（静岡大学教授）・高瀬要一（奈良国立文化財研究所）の指導のもと、大須賀町教育委員会の木佐森道弘が担当し調査に関する事務は大須賀町教育委員会事務局があたった。
4. 本書の執筆分担は以下の通りである。

   第１章・第２章　木佐森道弘　　第３章　斎藤　忠
5. 本書の編集は木佐森が行った。
6. 発掘調査に係わる資料は大須賀町教育委員会が保管している。
7. 調査ならびに本書の執筆にあたり下記の方々のご協力、ご指導を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

   水島和弘、松井一明、羽二生保、前田正一、島田冬史
8. 発掘調査参加者

   作業員　大石猪太郎、鈴木藤市、磯村力、藤田長吉、戸塚正一、戸塚重一、内藤令作、服部惣一郎、金丸久子、佐々木はるゑ、秋山とよ、加藤きぬ枝、粕谷一江、花井弘子、戸塚とよこ

   整理員　夏目かん、佐野いと、堀江つね

史跡横須賀城跡Ⅳ
昭和62年度保存修理事業概報

目　　次

例　　言

第１章　昭和62年度の事業概要 …… 1

　第１節　土地の公有化事業 …… 1

　第２節　発掘調査事業 …… 1

　第３節　保存管理事業 …… 1

　第４節　整備委員会及び保存に係わる会議等 …… 1

　第５節　現状変更の一覧及び固定資産税の減免 …… 2

第２章　発掘調査の概要 …… 5

　第１節　調査に至る経緯経過 …… 5

　第２節　調査の方法 …… 9

　第３節　遺構について …… 9

　第４節　遺物について …… 16

第３章　ま と め …… 19

挿　図　目　次

第１図　城跡全体図及び年度別発掘区 …… 3・4

第２図　横須賀城跡位置図 …… 6

第３図　遺構全体図 …… 7・8

第４図　集石遺構01、Ｄ４区配石遺構01実測図 …… 10

第５図　Ｂトレンチ、Ｃトレンチ土層図 …… 11

第６図　西の丸西側斜面トレンチ土層図 …… 12

第７図　石列状遺構01実測図 …… 13

第８図　Ｃ５区階段状（石段状）遺構実測図 …… 14

第９図　石列状遺構02実測図 …… 15

第10図　Ｃ５区小曲輪状部分（Ｆトレンチ）土層図 …… 15

第11図　出土遺物実測図(1) …… 17

第12図　出土遺物実測図(2) …… 18

別　図

第１図　Ｅ５、Ｅ６区集石遺構群図

図　版　目　次

図版 1　1. 調査前風景（東より）
　　2. トレンチ設定状況（東より）
図版 2　1. 発掘区北側（東より）
　　2. 発掘区南側（東より）
図版 3　1. Ｅ５、Ｅ６区集石遺構群（北より）
　　2. 集石遺構群Ｅ６区（南より）
図版 4　1. 集石遺構群Ｅ６区（西より）
　　2. Ｅ５区集石遺構（東より）
図版 5　1. 集石遺構01（南より）
　　2. 集石遺構01断面（西より）
図版 6　1. 集石遺構01完掘状態（東より）
　　2. 配石遺構01（南より）
図版 7　1. 石列01（東より）
　　2. 石列02（北より）
図版 8　1. 階段状（石段状）遺構（西より）
　　2. 階段状遺構（北より）
図版 9　1. 階段状遺構石組状態（西側より）
　　2. 〃　（北側より）
図版 10　出土遺物(1)
図版 11　〃　(2)

第１章　昭和62年度の事業概要

第１節　土地の公有化事業

昭和57年度より継続して行っている横須賀城跡の公有化事業も６年目を迎え、本年度は昨年度より始まった西大手門跡東隣の、西櫓跡周辺の買い上げを実施した。

横須賀城跡は、東西二ケ所の大手門があり、当城跡の特徴となっている。東大手門については現在住宅となっており、復元整備は今の所難しい。したがって西大手門及び西櫓については、今後、復元整備を進めるために買い上げを実施した。

昭和62年度買上地

事　業　費	30,180千円
国庫補助金	24,000千円
県費補助金	2,000千円
買い上げ面積	1,096.22 ㎡
筆　　数	２筆
地　主　数	２名

第２節　発掘調査事業

昭和62年度の発掘調査は、西の丸の台地、及びその西側斜面に於いて実施した。平坦面については、絵図に描かれている西の丸御殿跡を、西側斜面については、前年度に検出された階段状遺構につながる登り口を検出することが第一目標となった。

第３節　保存管理事業

公有化済地の内、公園整備の済んでいる（通称「姫御殿」「蔵跡」「井戸曲輪」）と呼ばれている部分の、横須賀城跡公園年間管理（肥培管理作業、病害虫防除作業、整枝作業、芝生年間管理作業等）を行った。

既公有化地で未整備の部分については伐開草苅工事を行った。

その他

・公園全体の除草については大須賀町教育委員会が直営で行っている。

・梅園の病害虫防除、整枝作業等の管理については大須賀町郷土研究会が管理を行っている。

第４節　整備委員会及び保存に係わる会議等

整備委員会と保存推進委員会をそれぞれ２回開いて土地公有化事業、発掘調査、復元整備事業等について協議検討をおこなった。

会議の日程は下記の通りである。

昭和62年７月21日　第１回保存推進委員会

〃　　９月８日　第１回城跡整備委員会

〃　　12月24日　第２回城跡整備委員会

昭和63年１月11日　第２回保存推進委員会

第５節　現状変更の一覧及び固定資産税の減税

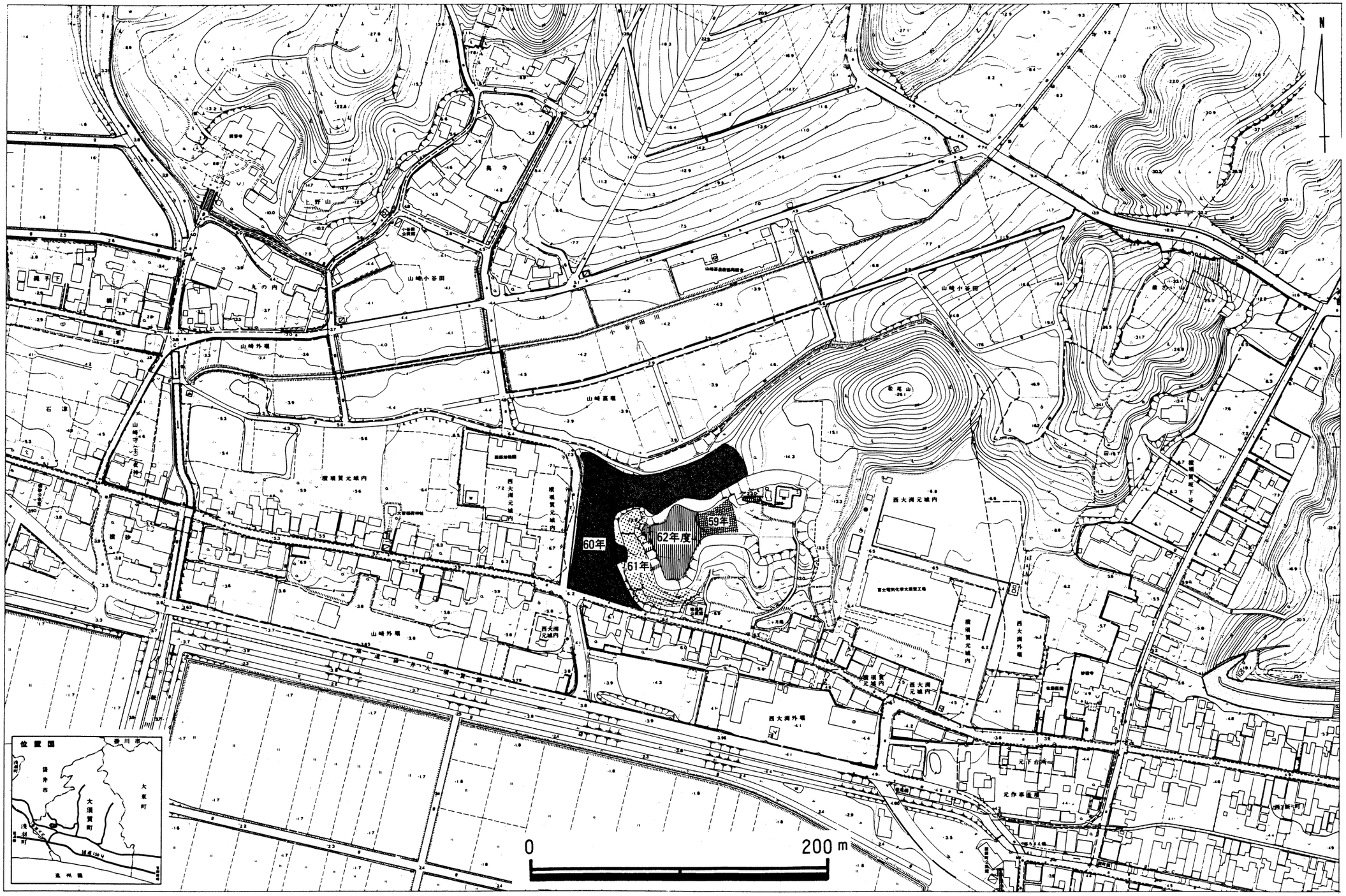
昭和62年度の現状変更の申請は下記の通りである。

申請件数５件

内訳	幼稚園プール改築	１件
	住　宅　新　築	２件
	住　宅　改　築	１件
	コンクリート壁改築	１件

固定資産税の減免

横須賀城跡の指定地内は保存管理基準によって、Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区に区分されている。Ａ・Ｂ地区については、土地の固定資産税を免除（Ｂ地区は半額）しているが、昭和62年度の申請者は59名で還付金額は778千円であった。



第１図　城跡全体図及び年度別発掘区

第２章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯経過

1.　調査に至る経緯

本城跡の発掘調査は、買い上げ公有化地の復元整備の一環として昭和59年度より継続しておこなわれている。

本年度の調査は整備計画及び前年度調査の成果を踏まえ、保存推進委員会、整備委員会を経て、西の丸跡の平坦面及びその西側斜面に決定し、昭和62年10月12日から、昭和63年３月23日までの５ケ月間おこなった。体制は以下の通りである。

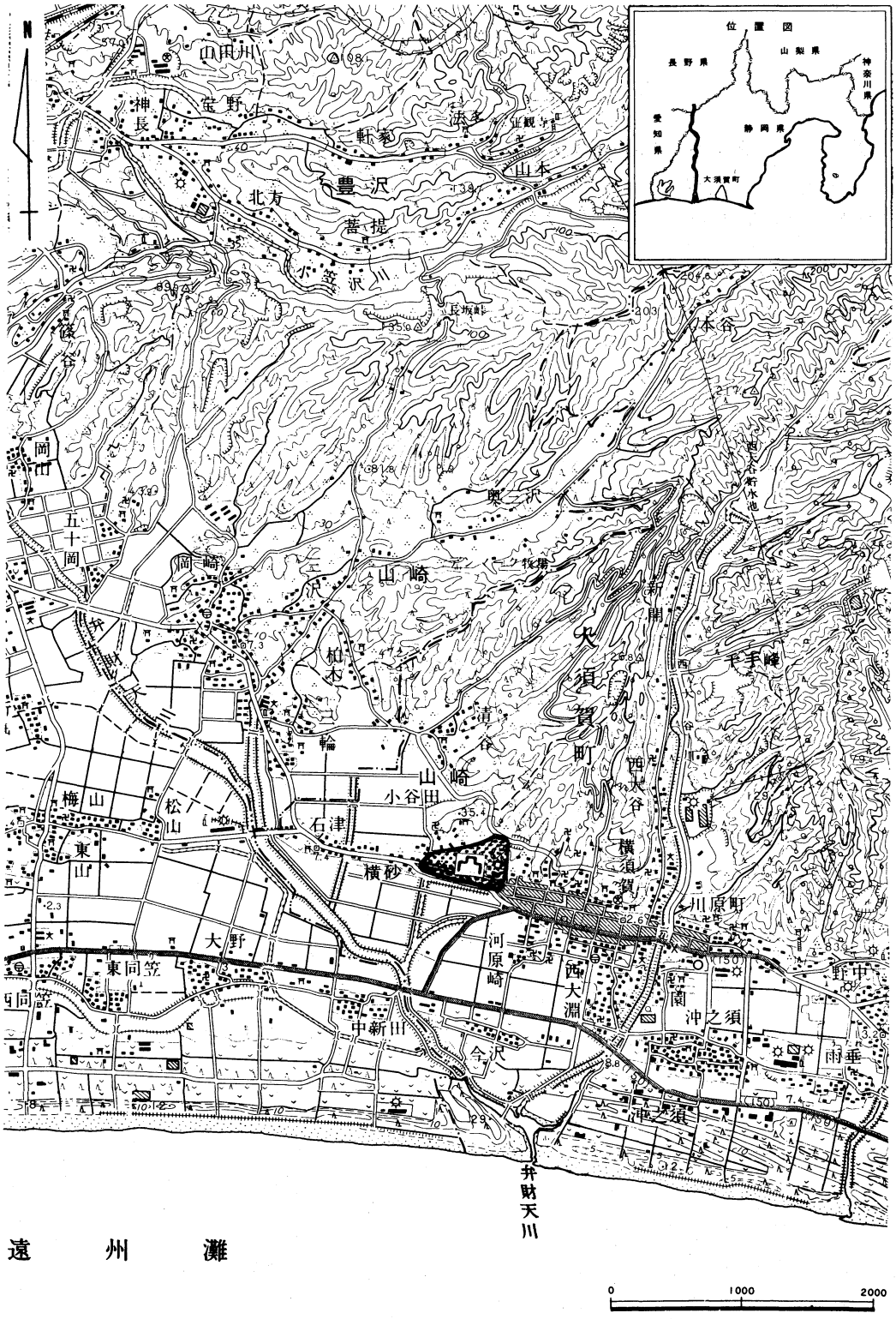
調査主体　　大須賀町教育委員会
調査指導　　斎　藤　　忠（大正大学名誉教授）
　　小和田　哲　男（静岡大学教授）
　　高　瀬　要　一（奈良国立文化財研究所）
調査事務　　大須賀町教育委員会事務局

2.　調査の経過

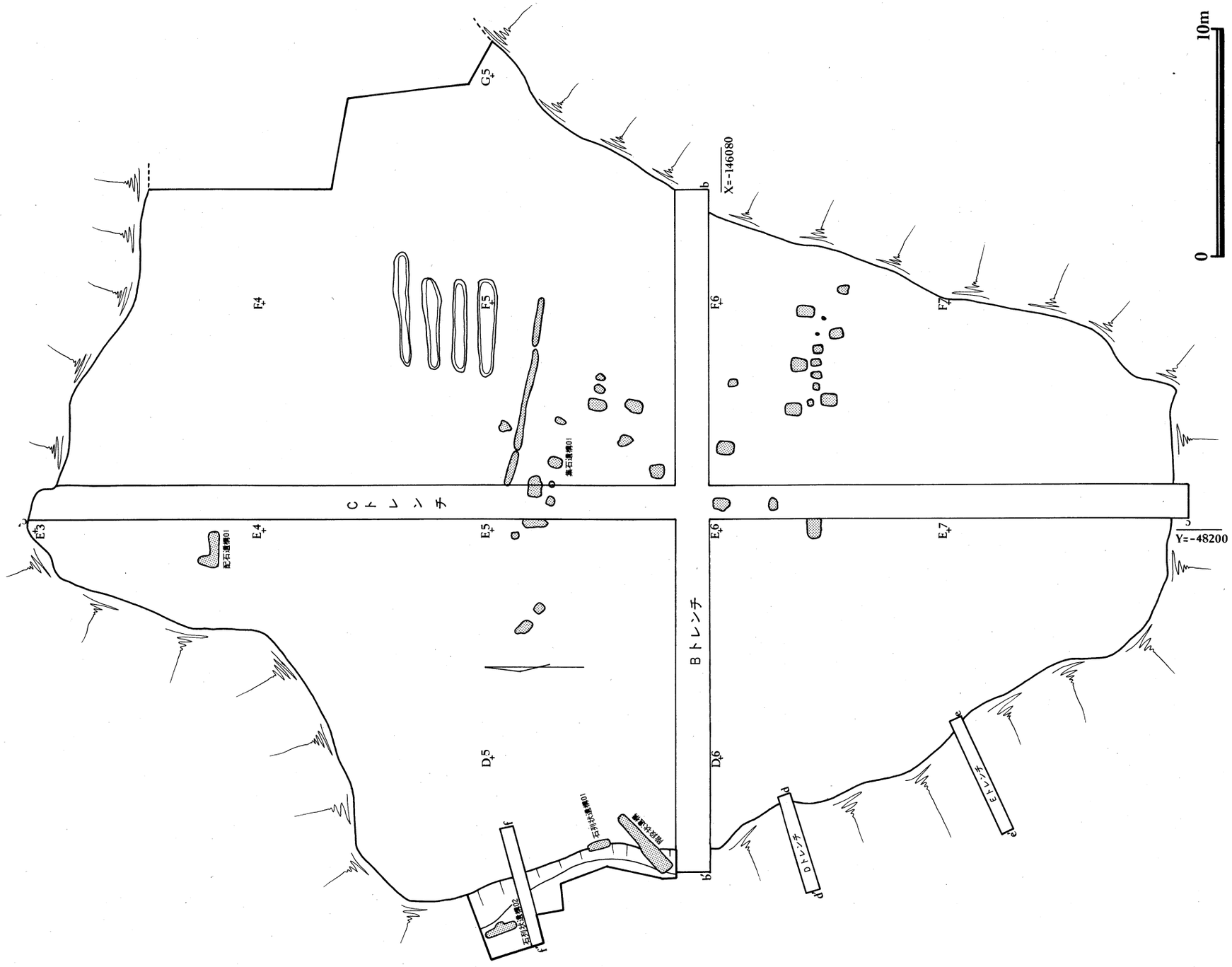
発掘調査は途中に別の調査が入ったりして、当初の計画より長期間の調査となった。

調査日誌抄

昭和62年10月12日　発掘開始、グリッドを設定する。
〃　10月14日　トレンチを設定し掘り始める。
〃　10月23日　南西隅より掘り始める。
〃　11月11日　集石遺構群を検出する。
〃　11月18日　西側斜面にサブトレンチ２本を設定する。
〃　11月21日　Ｃ５区の小曲輪状の部分で石列を検出する。
〃　11月25日　集石遺構の実測を始める。
〃　12月24日　午後より城跡整備委員会、現場において委員より指導を受ける。
昭和63年１月14日　１／20図面実測開始。
〃　１月18日　Ｃ５区の西斜面にサブトレンチを設定して掘り始める。
〃　２月２日　集石遺構群の写真を撮影する。
〃　２月12日　西の丸平坦面の完掘状態の全景写真を撮影する。
〃　２月18日　西の丸平坦面の埋め戻しを開始する。
〃　３月10日　北西部分Ｃ５区のサブトレンチで階段状遺構を検出する。
〃　３月19日　階段状遺構の実測を開始する。
〃　３月23日　埋め戻し完了、現地調査終了。



第2図　横須賀城跡位置図


0
10m
X=-146080
Y=-48200
Cトレンチ
Bトレンチ
Dトレンチ
Eトレンチ
F4
F5
F6
F7
G5
E3
E4
E5
E6
E7
D5
D6
集石遺構01
配石遺構01
石列状遺構01
石列状遺構02
焼成土遺構

第3図　遺構全体図

第2節　調査の方法

調査は昭和59年度に設置した基準点を基に、国土座標に合わせて10m×10mのグリットを設定して調査にはいった。まず西側斜面において、登り口跡及び門跡を検出するため、平坦面の西側の縁に沿うように2m幅のトレンチを設定した。また発掘区の東西南北のそれぞれの中央になるように、2本のトレンチを設定して、遺構の残存状況、堆積状態等を把握してから、全面に拡げていった。遺物は各遺構、グリット毎に取り上げた。

第3節　遺構について

西の丸の平坦面は長期間にわたって茶畑として耕作されていた関係から、破壊が甚だしく遺構の残存状況は極めて悪かった。したがって、当初期待されていた西の丸御殿の明確な建物跡は、検出できなかった。

登り口跡については絵図に描かれているのとほぼ同じ位置において階段状の登り口跡を検出した。しかしその構造は前年度に検出した階段状遺構とは違っていた。したがって前年度の登り口跡とは直接接続していないとも考えられる。

1.　西の丸の平坦面

絵図によればこの部分には2棟の建物が描かれている。そこで今回の調査ではこの建物跡を検出する事を目標とした訳であるが、確実に建物跡と断定できる遺構は検出できなかった。しかし、中央よりやや東よりのＥ５、Ｅ６区において礎石の地固めの石と考えられる集石遺構群を検出した。この集石は大きいもので長径100㎝小さいもので50㎝程あり、平均的にみて70㎝内外のものが一番多い、形状は隅丸の長方形のものが多く、楕円形のものも観られる。今回の調査は遺構を埋め戻しその後復元整備することを目的としているため遺構の掘り下げは極力控えた。したがって集石遺構の掘方の平面形、構造についても未解明の点が多い、掘り下げたものから判断すると、掘方の平面形はやはり長方形、楕円形となっている。掘方の深さは基盤を10㎝内外掘り下げた程度である。しかし、現在の遺構面は耕作により削られていると考えられるので、実際はいま少し掘り込みが深かったと思われる。この掘り込みの中に長径5㎝～15㎝程の丸礫（瓦片も若干観られる）が隙間無く詰め込まれていた。また長径の大きい集石遺構には小礫が、長径の小さい遺構については比較的大きい礫が多く詰め込まれていた。覆土は灰褐色砂質土で表土とあまり差が無かった。

集石遺構の規則性は東西の列としては一定の間隔をもって並んでいるが、これを南北に観た場合には、それぞれの列が少しづつずれている。したがって建物跡として全体を観た場合全体を統一する規則性は観られ無い、また、これらの集石遺構のうち形の乱れたものについては、耕作により石を集めて捨てた穴とも考えられる。その他の集石遺構については遺構の大きさ等により差異が観られる。したがって時代的に差が有る複数の建物跡群が、重複しているとも考えられる。そこで建物跡としての規則性を見出すべく色々な配列を考えたが、建物跡としてはっきり捉える

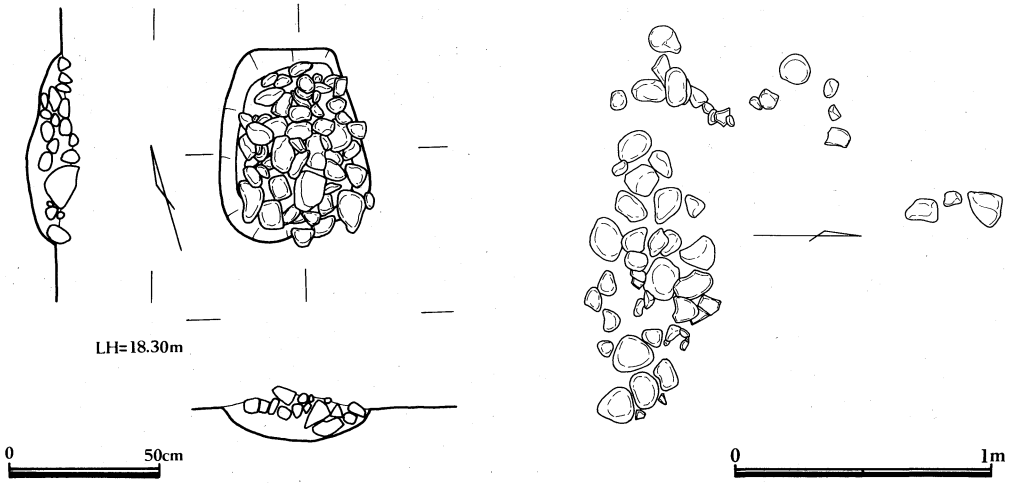
ことは出来なかった。しかし付近の古老の話によれば、この付近で家の礎石を捉える場合に、浅い穴の中に小礫を入れ地盤を固めて、その上に礎石を捉えることがあり、今回の集石遺構の構造等が良く似ていると云う事である。

Ｄ３区では配石遺構を検出した。径20㎝～30㎝程の丸礫が約１ｍの幅で配石されており、約３ｍの長さで東西にまっすぐ伸び西端で直角に北側に折れる。北側部分で、配石ははっきりしなく成る。建物跡に関係する配石遺構と考えられるが断定は出来ない、礫は版築された盛土層から突出する形で検出された。

Ｅ５区の北側部分に於いて大小の礫が詰め込まれた溝を検出した。溝の幅は20㎝～30㎝程度で深さは20㎝程度であり、途中切れながら全体で10ｍ程の長さがある。集石遺構も此の溝から北側には観られ無い、したがって建物の雨垂れ部分に造られた施設の可能性も考えられる。しかし埋土が堆肥状の腐植土が混った土であり、耕作に伴う暗渠排水と考えたい。

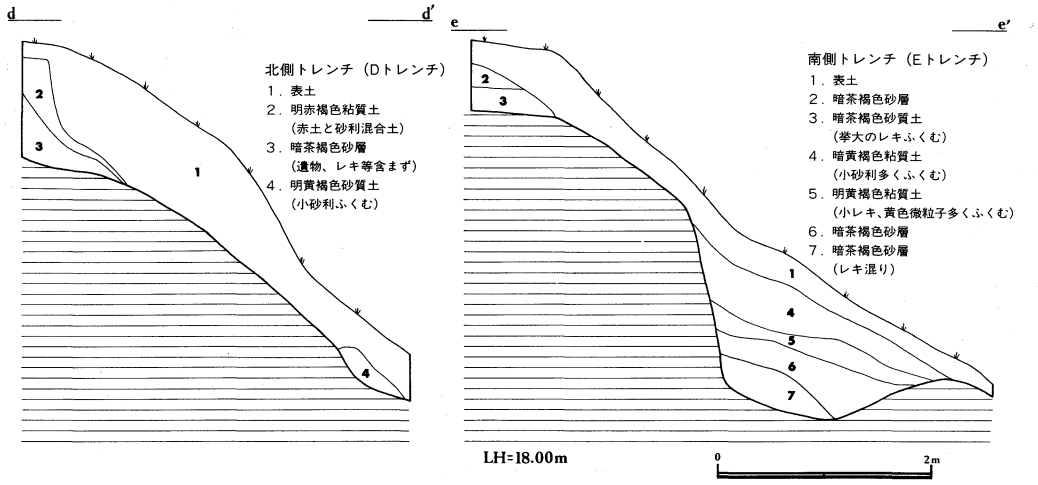
Ｅ４区では、東西に平行に並ぶ溝を検出した。長さは４ｍ～５ｍ、幅は40㎝～60㎝、深さは30㎝～50㎝程の溝で、四本の溝が東西に整然と並列している。埋土中からビニール、ガラス壜等が出土しており、耕作に伴う施設で野溜の一種と考えられる。

西の丸の中央を通るように、東西、南北それぞれ一本づつのトレンチを十字に入れ、土層観察を行った。その結果、西の丸の平坦面の中央部は地山が露出し、裾部は版築されて築かれている事が判明した。つまり中央が高い尾根状の地形の中央部分を削平して両側へ土を均らし、版築して平坦面を造成し、其の上に建物を築いたと考えられる。なお北西の斜面部分の、小曲輪状の狭い平坦部は地山が浅く、西の丸の中央部分に露出する地山からなだらかに続いていると考えられる。したがって、この小平坦面と西の丸の平坦面との段差は版築された盛り土によって造られたと考えられる。盛土の時期は西尾氏の家紋である櫛松紋入りの瓦が盛土表面から突出する形で出土している事から考えて、少なくとも表面に近い部分については西尾氏が入封した天和２年（1682）を遡らないと考えられる。



第４図　集石遺構01、Ｄ４区配石遺構図

第5図　Bトレンチ、Cトレンチ土層図



第6図　西の丸西側斜面トレンチ土層図

2.　西側斜面部分

この部分には2本のトレンチを入れ構造を調査した。その結果、地山は西の丸平坦面の中央部分の露出した部分から緩やかに傾斜して縁辺部に至り、ここより急激に下がっている。特に南側のトレンチの地山は途中からほぼ垂直といえる程、急激に下がっている。天守に隣接する重要な部分の西側斜面であるから、築城時、或いはその後の改築時に急峻に削り出されたとも考えられる。

南側のトレンチでは地山層が急激に下がった後2*m*程離れた部分で土塁状に高くなっている。或いは西の丸を守るために造られた土塁と浅い溝かもしれない、北側のトレンチでは下部が、公園化されているため此の溝状の落ち込みと土塁状のものが北まで続いているか確認出来なかった。また南側のトレンチでは、或る時期にこの溝状の部分が埋められたとみられ、土塁状の高まりから西の丸の縁辺部まで続く赤土の層があった。此の上面が廃城当時の面と考えられる。この遺構を溝と土塁と考えた時、其の初期、実戦的な防衛施設として造られたこれらの遺構が近世も時代が下って、その意味を失い埋め立てられたとも考えられる。

3.　西側斜面の登り口

絵図面によれば、西側斜面の北側部分に階段状の登り口が描かれている。そこで西の丸の西側縁辺部について慎重な調査を行った。その結果2ケ所に於いて、石列等の遺構を検出した。

C5区中央の西の丸平坦面の縁辺部において長径約20㎝の偏平な丸礫を5個程並べて石列が造られている。しかし石が乗っている基盤の土は表土と区別が付かない土である。したがって廃城以後に造られた石列と考えたい。しかし耕作に伴って造られた石列と考えるには不自然な点も多く、城跡に関係する登り口の一部、との考えも捨て切れない、そこでこの周辺部分の精査、遺構検出作業を何回か行ったが石列に関係する遺構は検出できなかった。

Ｃ４区、Ｃ５区の境界の小曲輪状の小中段部分に於いて石列を検出した。長径が20㎝～30㎝程の丸礫を西の丸の西斜面との境に一列に並べた石列で長さは１ｍ30㎝程ある。石質は小笠山礫層中に一般的に観られる丸礫を使っている。石列は廃城以前の近世の遺構面に造られており、城跡の施設の一部と考えられる。その形態が昨年検出された階段状遺構の石列と似ているため、登り口の一部と考え付近を精査したが、これ以外の遺構は検出できなかった。

4. 小曲輪状の平坦面基部の階段状登り口

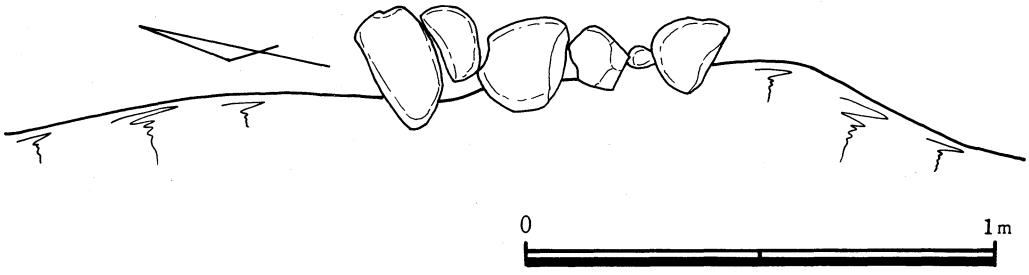
Ｃ５区の中央部の西側斜面上部に於いて階段状の登り口を検出した。この地点は絵図において登り口と門が描かれている地点である。この階段状遺構は、長径20㎝～40㎝程の大きさの丸礫を巧みに組んで石段状に造られている。また南側の縁には石段に沿って、偏平な石が立てられて組まれ、石段の縁石となっている。石質は小笠山礫層中に普通に観られる丸礫であり切石は観られなかった。丸礫と丸礫の間の隙間には小礫が詰められている。

石段の幅は50㎝程であるが、北側部分には明らかに石が抜かれた形跡があり、実際はいま少し幅があったものと考えられる。実際の幅は今回の調査では解明できなかったが、現状の幅は人間一人が登り降りする幅しかない、しかし最低でも人間二人がすれ違い出来る程の幅はあったとおもわれる。

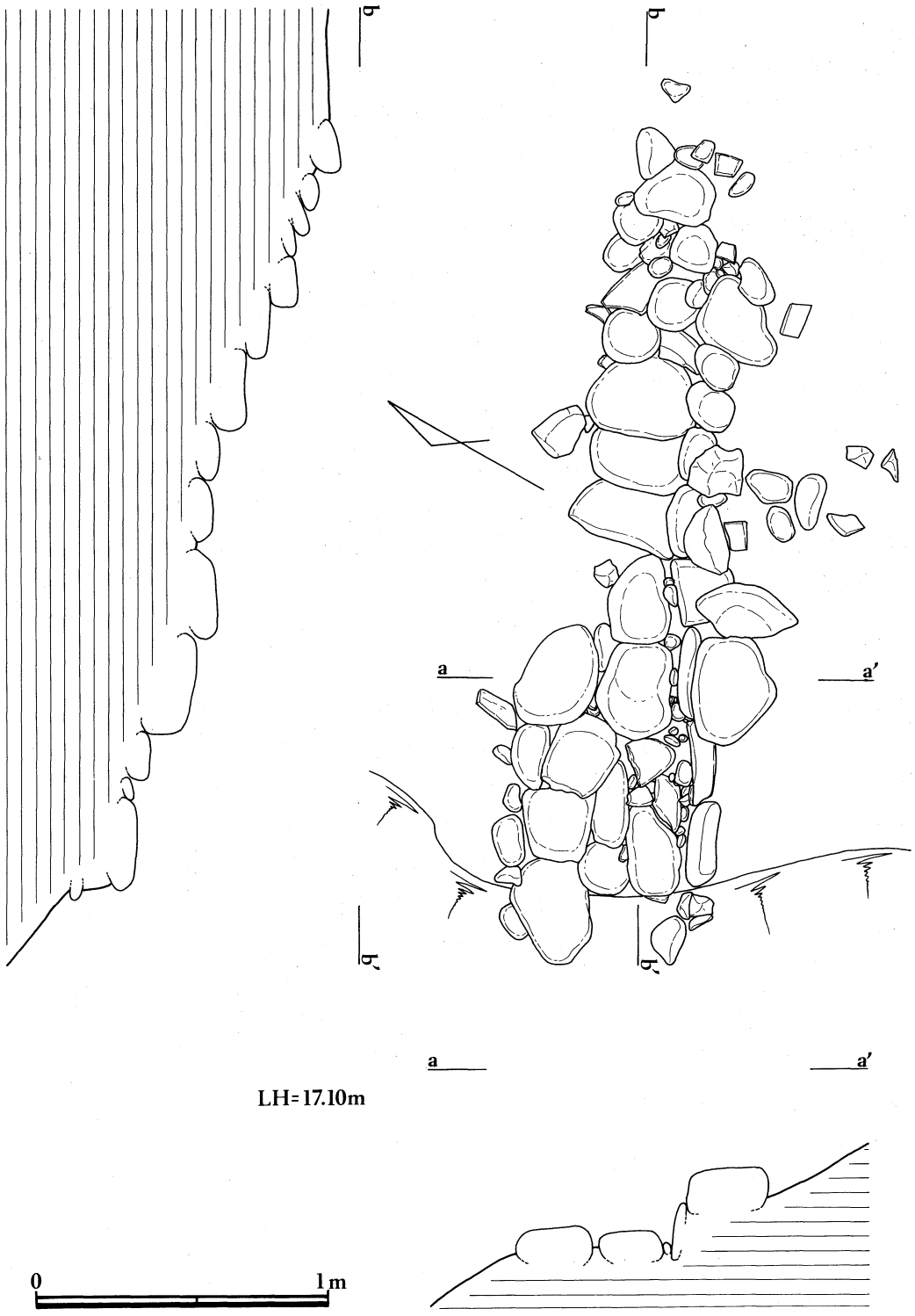
遺構の西端は分断され途切れている。自然に崩落したのか人為的に削り採られたのか、解明はできなかった。

遺構は西の丸の平坦面を造る盛土層に覆われた形で出土している。したがって、すでに廃城時には、この登り口は廃止され利用されていなかった事が判明した。廃止の時期については遺物がほとんど出土しなかった事から、特定出来なかった。しかし前述した通り盛土層の表面から櫛松紋入の遺物が出土しているので、この部分についても西尾氏の入封以後に埋められたと考えられる。

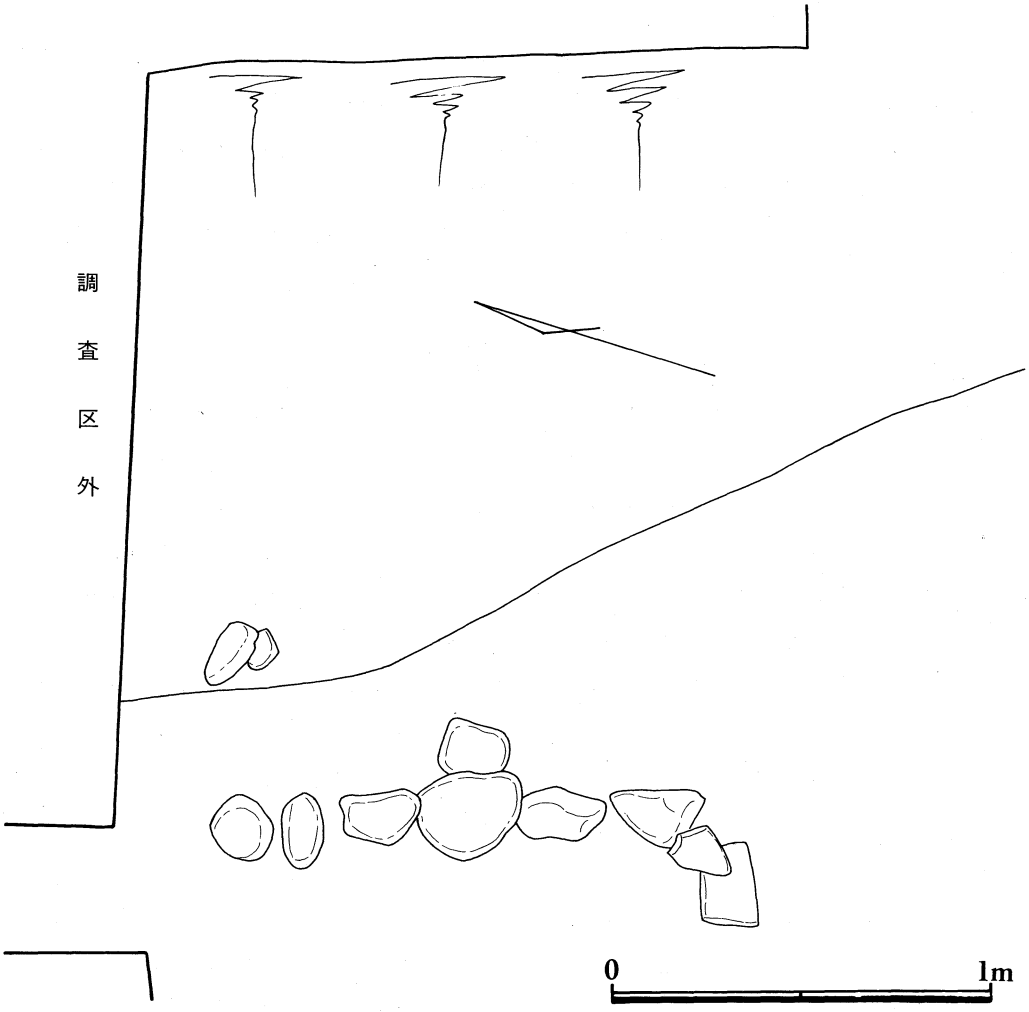
今回の調査で検出した登り口は、前年に検出した登り口とは構造的にまったく違っている。したがって両遺構の間には時期差があるとも考えられる。



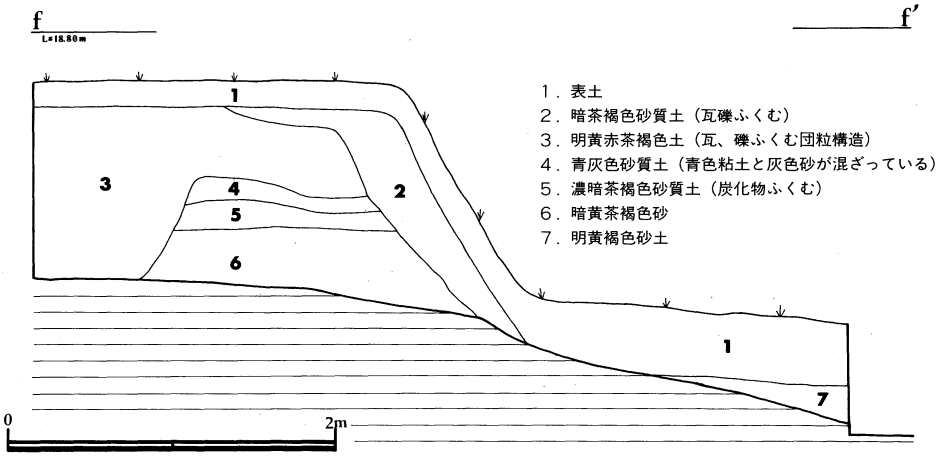
第７図　石列状遺構01実測図



第8図　C 5 区階段状（石段状）遺構実測図



第９図　石列状遺構02実測図



第10図　Ｃ５区小曲輪状部分（Ｆトレンチ）土層図

第4節　遺物について

今回の調査では瓦、陶磁器、石器等が出土している。しかし前述の通り今回の調査地は耕作による改変が甚だしく、出土した遺物の量も今までの調査にくらべ極端に少なかった。昭和60年、61年度の西の丸西側の調査では多量の遺物が出土している事等から考えて西の丸に有った瓦等は、廃城時に下段部分に投棄されたと思われる。また耕作によっても相当の遺物が斜面等へ廃棄されたと思われる。そんな状況から小破片がほとんどで図面にとれる遺物は少なかった。以下概略を述べる。

1.　瓦

例年の調査では紋様入瓦等多種多様の瓦の出土をみるが、今回の調査では限られた種類の瓦が出土しただけである。

1、2、3は軒丸瓦である。1は瓦当に、正保2年（1645）～天和2年（1682）の間城主であった本多氏の家紋である立葵紋を付ける。焼成はすこぶる良好であり瓦当の裏面は丁寧に、なで成形されている。2、3は、天和2年（1682）から明治1年（1868）までの期間城主であった西尾氏の家紋である櫛松紋を付ける。櫛松紋には櫛の歯が7本のものと9本のものがあるが、1、2はいずれも9本歯の櫛松紋である。2の瓦当の直径は15㎝を測る。焼成は焼きむらがある。3は、瓦当の直径14.5㎝、焼成は良好、瓦当表面に離れ砂がみられる。

4は菊丸瓦である。瓦当の直径は8㎝焼成は良好で、全体に撫で成形が成されている瓦当の紋様は16弁の陽刻の菊紋である。5は軒平瓦である。焼成は良好だが磨滅が甚だしい、瓦当の中央に立葵紋をつける。6は用途不明の瓦であるが鳥衾に似た瓦であり鬼瓦等に差し込んで使用したと考えられ、取りつけるための把手状の部分が付いている。瓦当には紋様をつけるが破損と磨滅が甚だしい、一見櫛松紋の松の部分にも見えるが、輪郭がハート形をしているその点では立葵の一部分にもみえる。7、獅子口瓦の一部と考えられる。瓦当に櫛松紋の松の部分が見える。

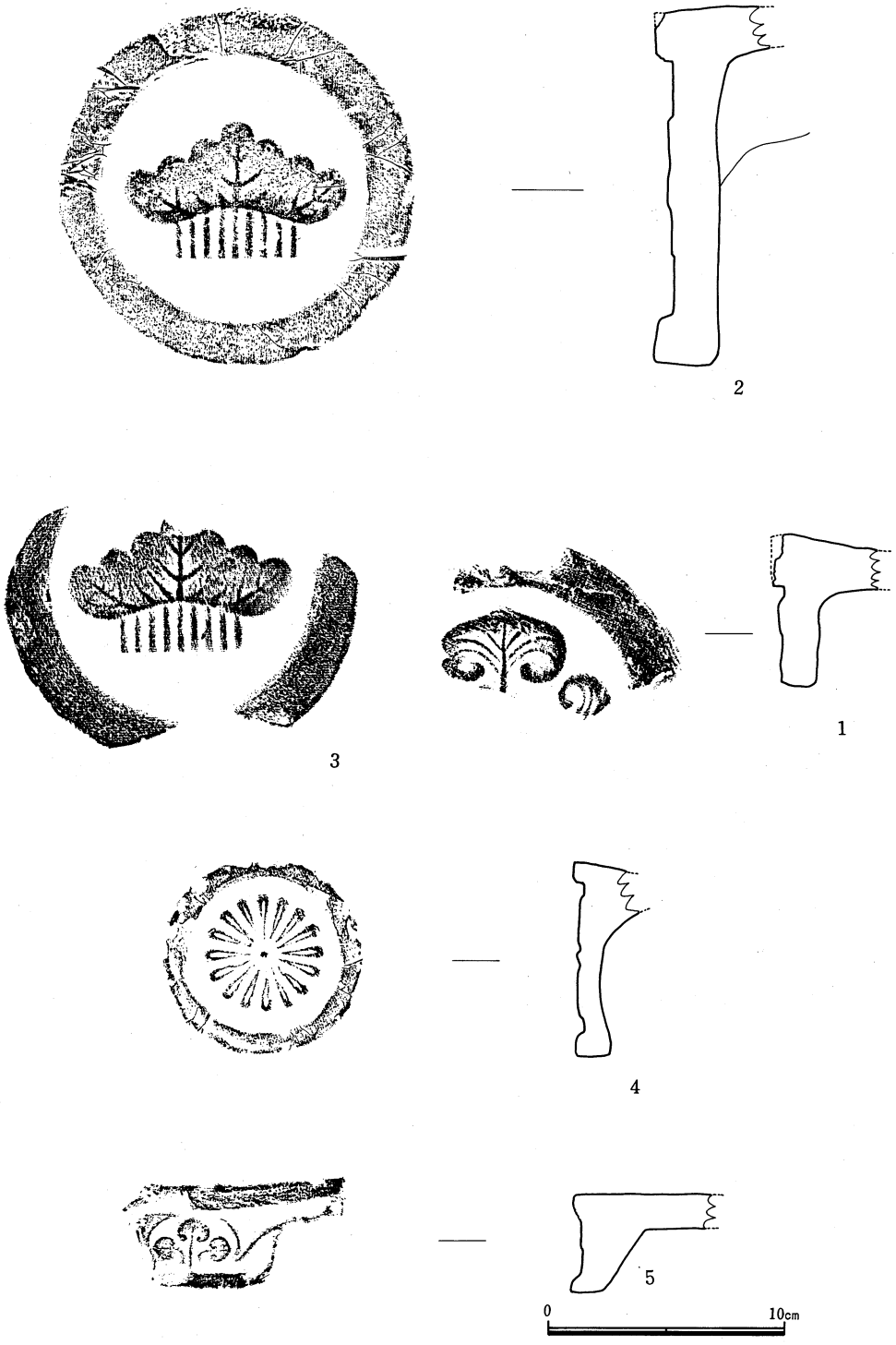
2.　陶磁器類

例年の調査で多量の遺物の出土をみるが本年度の調査地では目立った遺物の出土はなかった。

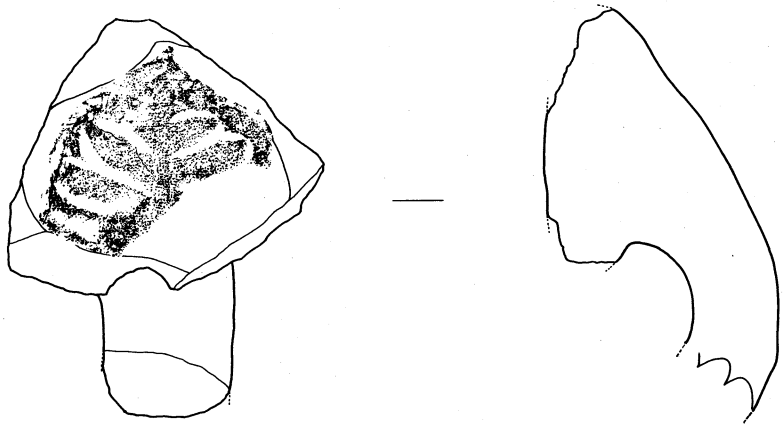
3.　石製品、石器

8は楕円礫の両端に加撃を加えてえぐりを作るいわゆる石錘である。礫の最大径73㎜×61㎜で、えぐり部分の径69㎜、最大厚15㎜を計る。用礫の材質は砂岩である。

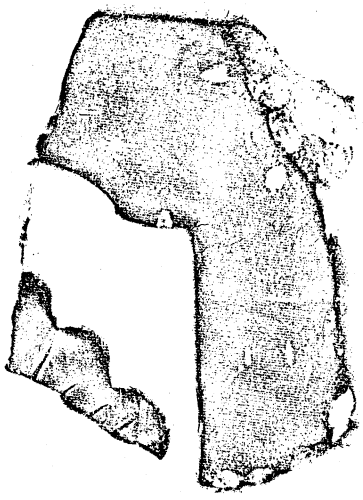
9は片岩系の石を利用した長方形の砥石である。片面は平らだが反面はそいだ様に使いこまれていて、一見すると石斧のような形態である。両面に多くの擦痕がみられ平らな面には溝状の使用痕が見られる。片面は割れているが現存部分の最大厚は13㎜である。本来はさらに厚かったものと思われる。



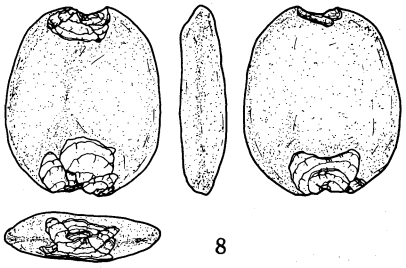
第11図　出土遺物実測図(1)



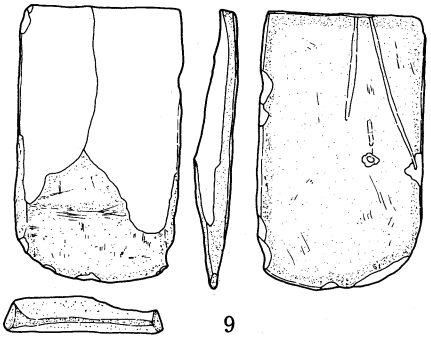
6



7



8



9

0 10cm

第12図　出土遺物実測図(2)

ま　と　め

昭和59年度より始まった、史跡横須賀城跡の保存修理事業に伴う発掘調査も４年目を迎え、前年度調査地の東側、西の丸の平坦面とその西側斜面について調査を実施した。本年度の調査地内には、絵図によれば建物と登り口、門等が描かれている。そこでこれらのはっきりした遺構の検出を期待した。しかし今年度の調査地は長年にわたって耕作されていた関係から、遺構の改変が甚だしく期待した成果は得られなかった。そんななかでも幾つかの成果が得られた。

1. 西の丸の西側斜面にある小曲輪状部分の基部において階段状（石段状）遺構を検出した。
2. 同所小曲輪状部分において登り口に関係すると思われる石列を検出した。
3. 西の丸の平坦面において建物の礎石の地固めの石と考えられる集石遺構を検出した。
4. 西の丸平坦面の構造、盛土の様子が解明できた。

以上の様な成果があった。西の丸の平坦面については集石遺構群を検出したものの、耕作による改変がひどく遺構解明の大きな障害となった。しかし西側斜面部において前年度と全く構造の違う階段状遺構が検出できた事は、大きな成果であったと考える。

来年度以降調査は城郭の中心部分である本丸方面に広がっていく予定であり、今後とも慎重な調査と、充分な検討による横須賀城跡の復元整備事業の遂行が望まれる。

図　　版

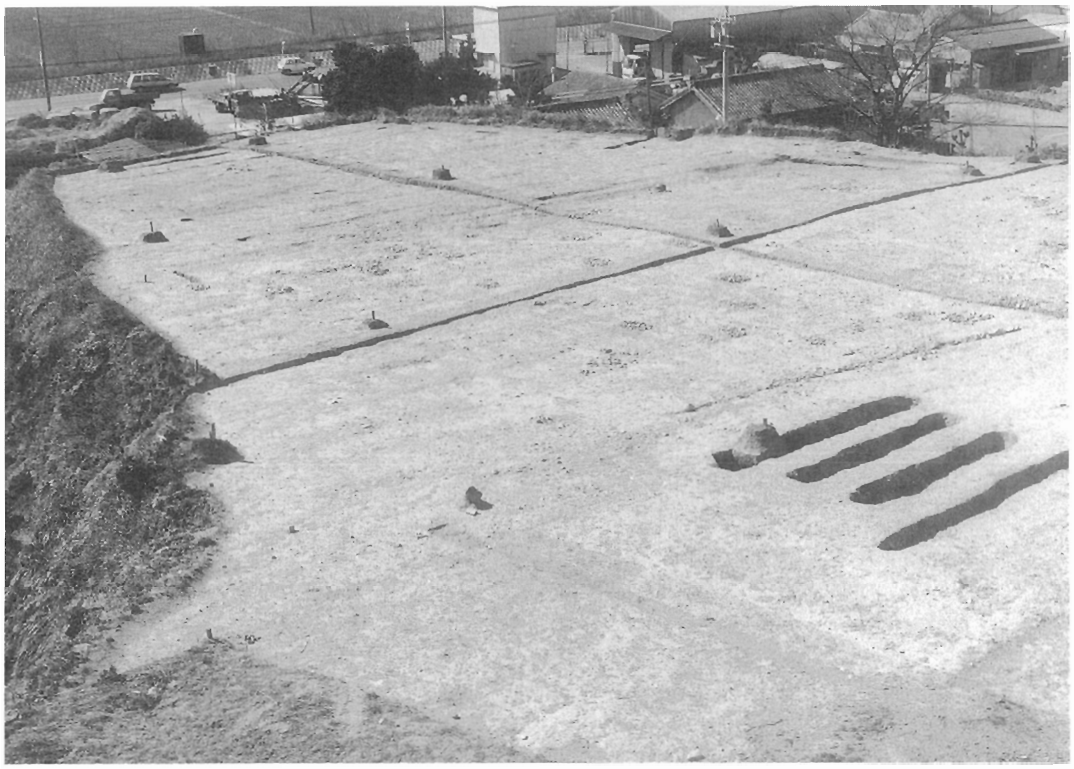
図版 1

1．調査前風景（東より）

2．トレンチ設定状況（東より）

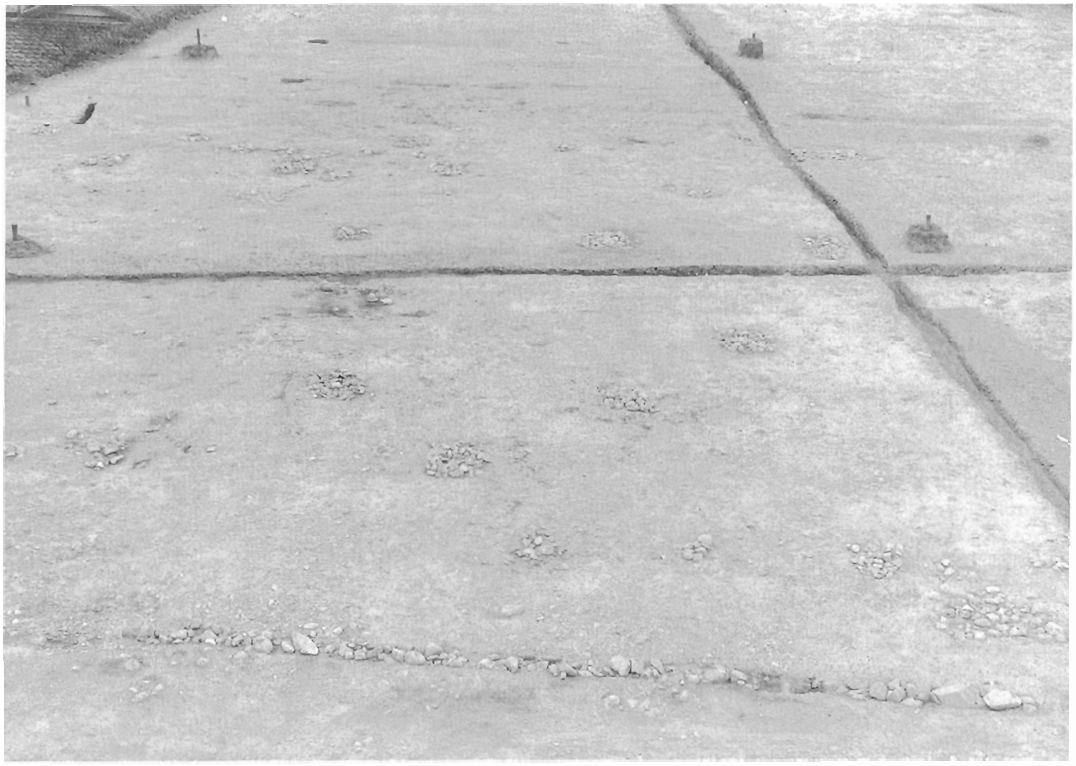
図版2

1．発掘区北側（東より）



2．発掘区南側（東より）

図版3



1．E5・E6区集石遺構群（北より）

2．集石遺構群E6区（南より）

図版4

1．集石遺構群E6区（西より）

2．E5区集石遺構（東より）

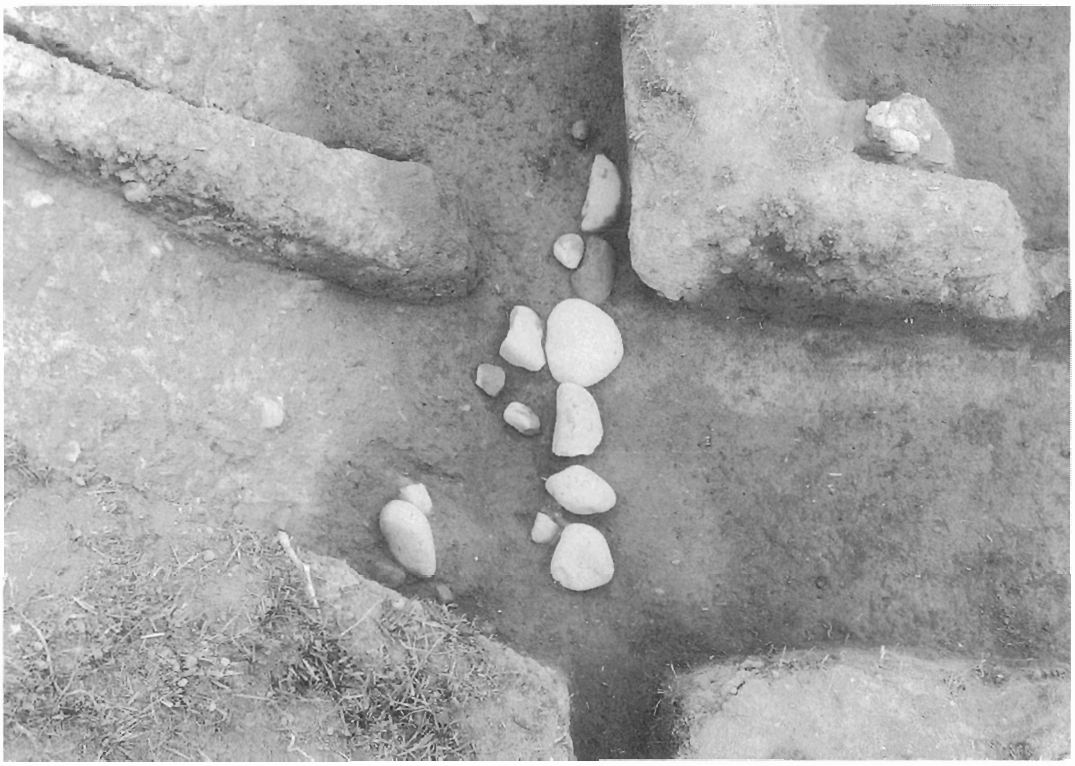
1．集石遺構01（南より）

2．集石遺構01断面（西より）

1．集石遺構01完掘状態（東より）

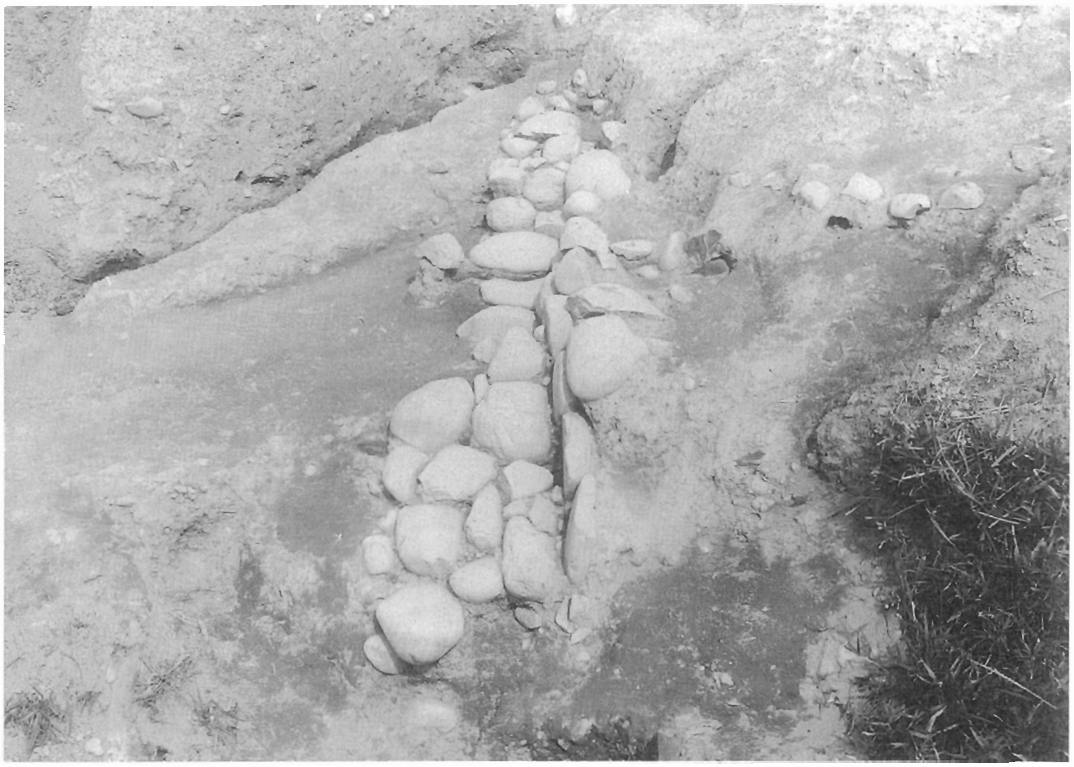
2．配石遺構01（南より）

1．石例01（東より）



2．石例02（北より）

図版 8



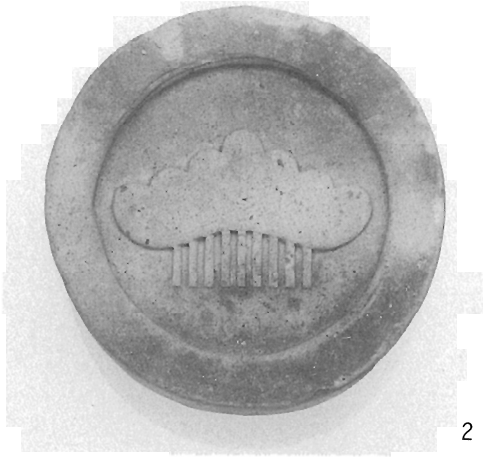
1．階段状(石段状)遺構（西より）

2．階段状遺構（北より）

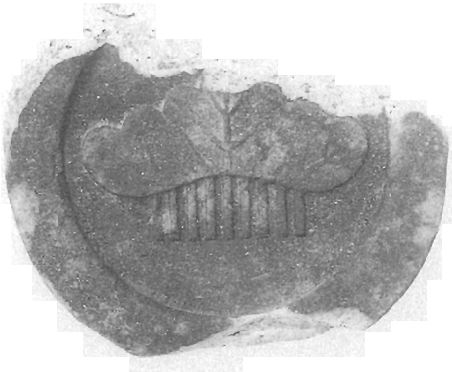
1．階段状遺構石組状態（西側より）

2．階段状遺構石組状態（北側より）

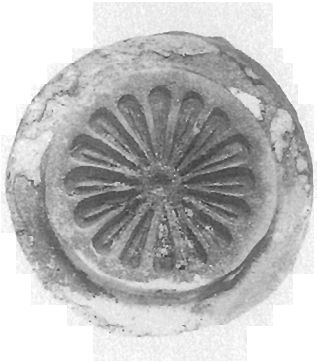
1



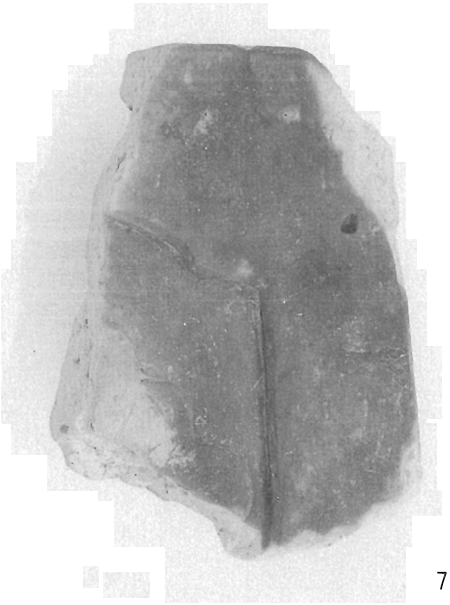
2



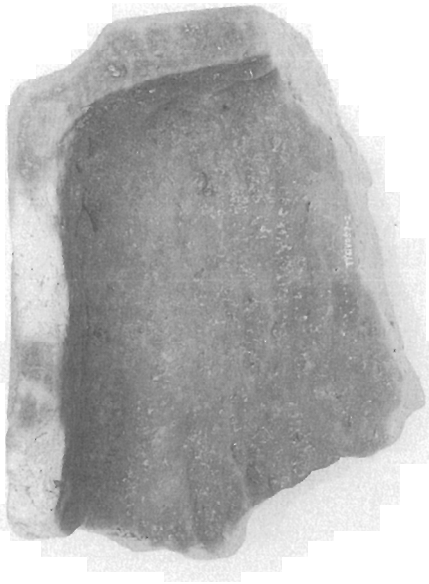
3



4



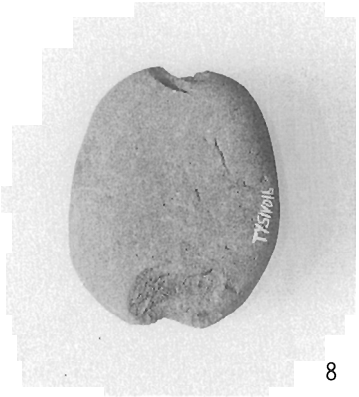
7

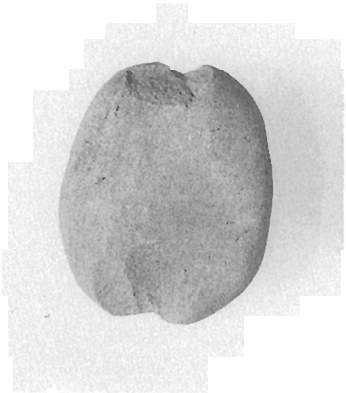


出土遺物（2）

図版11

6





8

9

史 跡 横 須 賀 城 跡 Ⅳ
昭和62年度保存修理事業概報

昭和63年 3 月31日

編 集
発 行　大 須 賀 町 教 育 委 員 会

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町 166－1
電話（0542）82－4031(代)